

〈書評と紹介〉 青森県史編さん古代部会編 『青森県史 資料編 古代2 出土文字資料』

三上, 喜孝 / MIKAMI, Yoshitaka

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

70

(開始ページ / Start Page)

94

(終了ページ / End Page)

98

(発行年 / Year)

2008-09-30

こうした傾向はある意味当然で、現実問題として、残されている文献史料だけからでは、その地域の古代史像をなかなか構成しづらい。近年の発掘調査に伴う出土文字資料は、史料の少ない地方社会の古代史研究にとって、いわば「救世主」ともいえる資料群なのである。また、できるだけ地域社会の資料から、地域社会の歴史を考える、という本来あるべき研究姿勢にも合致する。ただし出土文字資料を用いた研究は、一筋縄ではいかないところもあり、実際のところ思い描くような早急な研究の進展はなかなか望めないのが現実であるが、ひとまず集成することに大きな意義があることは、誰しもが認めるところであろう。

本書はいわば、青森県史編さん古代部会が方針として打ち立てた古代北方史の総体的理解という方針を縦糸に、そして近年の自治体史編纂における古代出土文字資料の取り扱いという姿勢を横糸にして織り上げられたものといえるだろう。

二

次に、本書の構成と内容についてみてみよう。まず、小口雅史氏による「序論 編集にあたって」は、本書を活用するにあたっての指針である。資料採録の方針、墨書土器、木簡、漆紙文書などの出土文字資料の資料的性格、本書の構成などが、簡潔にまとめられている。出土文字資料にあまりなじみのない一般の読者にとって、基礎的な知識を確認しておく上で有益である。

第Ⅰ部では、本書の柱ともいえる青森県内出土の文字資料をまとめていく。まず青森県の出土文字資料を概観した上で、青森県

出土の木簡(新田(1)遺跡)と金石文(朝日山(2)遺跡)についての釈文と解説を掲載し、さらに県内出土の刻書・墨書土器を表の形で集成している。表のあとには刻書・墨書土器の写真や実測図の一部を掲載しているが、これらの掲載方針について、「序論」で次のように述べている。

取捨選択に際しては、典型的な、あるいは重要な意味を有する文字の字体を優先した。しかし、墨書・刻書のなかには判読がきわめて難しいものも多数あり、そうした場合はつねに実物(ないし写真)にもとって検討する必要があることには注意されたい。なお写真が入手不可能、あるいは鮮明でない場合には、報告書に掲載された実測図を転載した。文字の部分を人為的に強調して描かれた実測図の方が見やすいという意見もあろうが、実測図はあくまで担当者の見解に添ってトレースされたものであり、もちろんその学問的価値は尊重するが、資料としてどちらか一つしか掲載する余裕がないときには、写真の方を優先すべきであろうと考えた。もともと前記の事情で、必ずしもいい写真が存在するとは限らないので、実測図を用いた場合も多々ある。

写真と実測図の関係については、ここに述べられているとおりでと思う。とくに刻書土器などは、写真の観察により筆順を追うことも可能である。この点は、集成における一つの見識を示すものとして高く評価したい。

また、重要な遺跡である五所川原須恵器窯跡群についての概要もあり、文字資料を出土した遺跡についての配慮も忘れていない。

その他の遺跡についても、各遺跡の一覽表の冒頭に、遺跡の概要説明が一〜二行でいど付されている。

第II部では、北海道から新潟県に至る地域で出土した墨書・刻書土器を県別に集成し、一覽表と図版を第I部と同様の方針で掲載している。

まず、各県の墨書・刻書土器の概要について、見開き二頁でいどでまとめたあと、遺跡の位置図、遺跡ごとの墨書土器一覽表、出典一覽、図版と続く。墨書土器の一覽表には、釈文、記銘方法（墨書か刻書か）、器種、記銘部位・方向、時期、出土遺構などの情報が収められており、墨書土器の情報はこの一覽表で一通り知ることができであろう。さらに、岩手県から新潟県に至る文字瓦についても、同様の集成をしている（北海道は未出土）。

第III部は、岩手県から新潟県に至る地域で出土した木簡と漆紙文書の集成であり（北海道は未出土）、これもまた圧巻というべきものである。単なる集成にとどまらず、各資料ごとに簡単な解説を加えているほか、従来の釈文を改めたものもあり（弘田柵跡出土三八号木簡〔六九七頁〕など）、青森県史編さん古代部会による調査成果が十分に反映されたものになっている。また、木簡の一部についてはあるが、鮮明な写真が掲載されているものもありたい。

なお蛇足だが、評者は以前に横手市の手取清水遺跡出土木簡一号（七〇一頁）を観察したとき、表面の「九子部」の人名の左隣を「妙堯□□（糲）稲□□」（「妙堯」は僧名か）、裏面の上段四行目を「日奉舍人□□□□」と読めるのではないかと考えたことがあ

るが、いかがであろうか。

第IV部では、陸奥・出羽地域における金石文・古印を集成している。とくに金石文については、現存しないものの近世の著作物などによって釈文が知られるものも採録している。これまであまり知る機会がなく、この集成により初めてその存在を知ったものもあり、興味深い。

なお、些事にわたるが、評者は以前、横手市において24号（五七九頁）として本書に採録している秋田県横手市雄物川町出土の双鳳八稜鏡（現存せず）の模写を軸装した掛け軸を拝見する機会を得たが、「永延三年八月三日辛□□」の干支部分は、残画からみても、この日の干支から考えても、「辛亥」と読んで問題ないと考えられる。

三

次に、本書を通覧して触発された論点を、評者の関心にしたがつて提示してみたい。

本書が『青森県史』である、という基本に立ち返って、墨書・刻書土器の一覽表を眺めてみると、いくつか興味深いことがわかる。青森県出土の墨書・刻書土器は、他地域に比べると、文字よりもむしろ記号が目立っているような印象を受ける。むしろこの背景には、五所川原須恵器窯跡群で生産された須恵器に、焼成前にヘラ記号のある土器が多く分布していることによるのかもしれない。だがそれにしても相対的にみて文字の割合がやや少ないとい

う印象は、やはりこの地域の特徴を考える上で重要である。

ふだん、東北地方の他の地域の墨書土器を観察していると、文字を書くことに対するこだわりがみてとれるのだが、青森県域の場合は、どうもそうはいえないような印象を受けるのである。

どうしてこのような違いがおこるのか。「序論」で小口氏が「蝦夷社会が簡単には律令制下に呑み込まれなかったことを意味する」と述べているように、城柵以北の蝦夷社会では、文字文化をそう簡単には受容しなかったのではないかと、という気がしてくる。

象徴的なものが、これまでもたびたび議論になってきた「夫」と書かれた墨書土器・刻書土器である。北海道から東北北部にかけて、「夫」と書かれた墨書土器・刻書土器が広くみられることはよく知られているが、この文字の意味については、これを「夷」の異体字とみて、蝦夷の饗宴の際に賜与されたものであるとする見解があるが一方、これを「奉」の省画とみて、日本列島の集落遺跡で一般的な墨書土器と共通した性格を持つものであるとする見解がある(平川南「墨書・刻書「夫」字の再検討」『墨書土器の研究』吉川弘文館、二〇〇〇年)。たしかに、「夫」を「夷」の意とするには問題があり、検討を要する。一方で「奉」が省画される例は墨書土器にしばしばみられるので、「夫」を「奉」の略体字とする可能性は考えられる。だが、これを「奉」と読んだとしても、「夫」の字が北海道から東北北部にかけて多く分布している事実(小口雅史「墨書土器研究の一事例」『法政史学』五八 二〇〇二年)や、「夫」を記したものは刻書土器の割合が比較的多いことの意味は、依然として未解決である。この文字を列島社会

共通の文字文化の一つとしてとらえるべきなのか、あるいはそもそも、北方社会の文字文化を列島の墨書土器と共通した性格ととらえてよいものなのか。この点は、列島社会が文字文化をどのように受容していったか、を考える上で今後ますます重要な論点になっていくであろう。その思いは、本書の一覧表を見ると、なおいつそう強くなるのである。

一方で、青森県域で出土する墨書・刻書土器には、「大」「十万」「川」など、列島社会で共通によく用いられる文字が使用されていることもまた事実である。なかでも注目されるのは「寺」「大佛」「神」といった、神仏に関わると思われる文字がみられることである。この点についてはすでに鐘江宏之氏が注目されており(鐘江宏之「東北地方北部における「寺」墨書土器」『呪術・呪法の系譜と実践に関する総合的調査研究(平成一六〜一八年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書)(研究代表者 小池淳一)二〇〇七年三月)、主に仏教信仰の受容との関係で説明されている。さらにこれを文字文化との関係でとらえると、ヘラ記号の顕著な青森県域にあつて、文字はとりわけ神仏などの信仰を媒介として受容されていったのではないかと、との見通しも立てたくなる。この点も、おおいに興味のあるところである。

四

以上みてきたように、青森県にとどまらず、北海道・東北地方(新潟県を含む)の出土文字資料を広く集成することによって、はからずも青森県の出土文字資料の特徴がみえてきたような気が

する。その意味においても、本書の編集方針は、きわめて有効であったといえるであろう。

さらに、附録として、本書掲載の表をMS Excel 2003形式で取めたCD-ROMが添付されているのも、特筆すべき事柄である。これにより、膨大な点数にのぼる墨書土器に関する数量分析や、同一文字の検索などを容易に行うことが可能となる。また、今後統々と出土するであろう墨書土器の調査に際しても、力強い味方となるであろう。

これだけの情報が惜しみなく提供されたいま、次に私たちの課せられた使命は、この情報を使いこなす技量を身につけることである。これらのデータを受動的に利用するのではなく、今後の調査にいかにか活かしていくか、あるいは、調査手法や研究方法をいかに高めていくかが、いま、私たちに問われている。本書がきっかけになり、出土文字資料についての研究手法がさらに高められていくことを期待して、この拙い紹介の筆を措きたい。

(二〇〇八年三月刊 A4判 八〇〇頁+C D一枚 頒布価格五九八〇円 青森県)